
お妃様の周辺の物語

もいもい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お妃様の周辺の物語

【Nコード】

N5358V

【作者名】

もいもい

【あらすじ】

お妃様の周辺にいる、とある三人が語ったお妃様のお話。
初投稿のうえに、ノリだけで書いた話です。

周辺その一（前書き）

初投稿です。

周辺その一

いやいや、力の限り当事者だろう。なぜ周辺に分類カテゴリーされているのか。馬鹿を申してはいけない。

なんと言ったって、わたしは彼女の夫だ。正真正銘、この国の王太子妃を妻に持つ男だ。つまり王太子だ。

そんなわたしが、妃の周辺な事情。涙を禁じ得ないが話さねばならない。

つい うっかり ポロツと

言ってしまったことに端を発するのかわたしが妃の周辺なことはいいや、ついもうっかりも、次元が違うのだ。これは不可抗力としか言いようがない。そして誰も悪くない。

*** **

わたしが妃を見初めたのは、この国の建国祭のときだ。それというのも、この間のはなしだが。ロイナー伯に連れられ、王宮内の様子をきらきらとした薔薇色の瞳で伺っていたのがとても印象的だった。まあ、いくなれば一目惚れというアレである。

そのときのわたしの様子を関係者はこう語る

「完全に呆けた、超弩級の阿呆面でしたよ」と。

なかなか辛辣なアレでアレだが、まあそんなことは気にしない。

そんなこんなで、周りのお膳立て（光の速さで強引だったが）もあり、わたしは念願叶ってあの麗しい娘を妻に迎えることができたわけである。

当の妃はといえば、それはそれは愛らしく花の精もかくやと思わせような、毎日ルンタツタな風情で過ごしてくれていた。わたしの顔を見上げてくるときの妃の瞳のうるうる感といたらもうっ……！ 薔薇色の瞳に見つめられるわたしが薔薇色！ ……みたいな。

……若干ひとりで盛り上がってしまった。

とにかく、結婚してからの三ヶ月間は、夢色・薔薇色・アツハツハという感じであった。

そう、三ヶ月間は ……。

わたしは わすれることが できない

アレを言ったあの瞬間、わたしが愛してやまないあの薔薇色の瞳が

火のように光り
血のように滾り
紅蓮のごとく燃えあがった

あの、恐怖の深淵を
。

周辺その一（後書き）

目を通してくださいます。ありがとうございます。

周辺その二

「まあ、なんてすてき」

羊皮紙を手にしながら、エレンはうつとりとつぶやいた。文字を追う淡紅の瞳は爛々と輝き、窓辺にたたずむ姿は、窓枠からまるでその場所だけを切り取った絵画のようである。

エレン　こと、エレン・ロイナー伯爵令嬢が手にしているのは、紛れもなく　王宮よりの書簡　その意味するところはひとつである。

「なんて、すてきな……」

それ以上は言葉にならないのであろうか。エレンは食い入るように手元の書簡を見つめている。

その様子をわずかに苦笑しながら見つめているのは、エレンの叔父、フレデリック・ロイナー伯爵である。なんとも夢見がちに育ってしまったものだ。純粹であるのは良いことだが、度が過ぎるとただの考えなしだ。

まあ、それでも良いか。こうして息災でいてくれて、なおかつ誰もが羨む王太子妃にと望まれているのだ。他ならぬ、王太子御自ら。

この穏やかな国のやがてトップとなる者に嫁ぐなど、これほど安泰なこともあるまい。手元において久しいが、エレンにとってこのうえなく栄誉な良縁を断る理由もない。亡き兄の面影を色濃く受け継いだ薔薇色の瞳は、今こんなにも煌めいているのだから。

エレンを養女として引き取ったのは、十一年前のことだ。エレンが五歳のとき彼女の両親はともに流行り病で亡くなり、兄に代わって爵位を継いだ。幼い姪は自分を厭うことなく素直に慕ってくれた。兄夫妻と同じ病で自らの妻も早くに亡くしたロイナーにとっては、エレンは唯一の希望だった。

「幸せになっておくれ」

喜色を表しては隠さない花のような笑顔の姪に、ロイナーは万感の思いをこめてつぶやいた。

三カ月後

叔父様聞いて！ 殿下つたらひどいのよ。わたし、あの恋文は、殿下御自らお書きになったものだと思っていたの。でも、そうではなかったの！ それどころか、恋文ですらなかったなんて！ そんな事実を今更知って、わたしはもう王宮では暮らしていけないわ。わたしがあのと抱いた恋心は、どこへ持ってゆけばよいの。

悲壮感ただよう姪に面会したのは、まだ彼女が嫁いで幾ばくもない頃。

「知らなかったの！ ああいったものは普通、ご本人がお書きになるものではないって」

確かに、王宮の公式書簡は王太子がしたためるものではない。然るべき地位にある大臣か文官かが国王や王太子に代わって、代筆するものである。

「知らなかったの！ あれがただの婚姻依頼書だったなんて」

仮にも未来の国王からの求婚の書簡を、ただ呼ばわり。しかも恋文と勘違いしていたとは。いや、勘違いなどという次元ではない。そもそも、あの書簡はエレン本人に宛てたものでもない。

「わたしは、わたしは、あの文の文字を見て、結婚しようと思ったのですもの！」

痛恨の一撃。

「だってお父様がお母様に宛てられた恋文は、とっても素敵だったのだもの。お母様は恋文が素敵だったから結婚したと仰っていたもの！」

義姉が、兄との思い出を幼いエレンに都度語っていたのだろう。

当時の恋人同士のやりとりの手蹟を見せてもいたのだろう。

そしてエレンも、父親のような手蹟に多大な憧れを抱いていたのだろう。

まさかこんなところに、落とし穴があるなんて。

だからか。あんなにうっとりとして書簡を見つめていたのは。

だがわたしは確かに言っただぞ。

「エレン、お前に婚姻の申し込みが来ている」と。

純粹？ 馬鹿？ いや、壊滅的に阿呆だ。

っていうか、字かよ！！

壮年の伯爵は、年甲斐もなく突っ込んだのであった。

周辺その二（後書き）

目を通してくださいます。ありがとうございます。

周辺その三

ぼくの名前は、セーラ・バントン。
女みたいな名前だけど、歴とした男です。

ぼくの職業は、王宮文書院の書簡士。
え？ そんな職業は、どこのファンタジーにも見当たらないって??
ってどうか書記でよくね？ですって？

いいえ、そこは作者の非凡なる才能の成せる技なのです。
面倒な説明を飛ばして、ノリで書いたこの小説を早く終わらせたい
という尋常ならざる作者の怠慢の加護があるからなのです。
しがたい一兵卒のぼくなんて、そんな作者の天賦の才に驚嘆して感
服して平伏する次第ですよ。
ジャンピング土下座、スライディング地べた ですよ。

どうでも良いギャグは脇道に描いておいて……。
最近の王宮事情は芳しくないのです。
それというのも、王太子殿下が迎えられたお妃様になにやら由々し
き問題があるから、だそうなのです。

男らしく、ズバツと簡潔に申し上げます。

お妃様は

王太子からの婚姻の申込書（通販の申込書みたいで、すみません）を、

ご本人様宛ての恋文と勘違いし、

次いでその申込書は王太子ご本人が書かれたものだと言点し、

申込書に書かれた文字のあまりの流麗さに心奪われ、

こんなにお美しい文字を書く人なら間違いはない、

お父様がお母様に送られた恋文に勝るとも劣らない素晴らしさであるのだから。

と仰って、このたびのご結婚に相成ったのです。

ところが三ヶ月が経ったある日、

『このお手からあのような華麗な文字が……』とお妃様が王太子殿下のお手を触られてうっとりなさっているところに、不審に思った王太子殿下が問いただしたところ（ニュースのアナウンスみたいですね）、あの申込書は王太子殿下が書かれたものではない、という衝撃の事実が判明したというのです。そして真実をお聞きになって打ちのめされたお妃様は、数瞬の後には悪鬼般若のごとくの様相を呈されたそうなのです。お妃様のお身体ご周辺からは風が巻き起り、地鳴りが響き、薔薇色の麗しいお目からは閃光が迸り、さらに天を切り裂くような角が生えた幻を見た、とは嵐からご無事のご生還を果たされた王太子殿下のご証言です。さながら辺りは阿鼻叫喚の地獄絵図のようだったと、目撃者は語ります。

そんなわけで、完膚なきまでにお心もお身体もぶっ潰された王太子殿下は、お怒りの冷めやらぬお妃様をなんとかお輿入れ当時の可憐

なお姿にお戻ししたいと、目下、孤軍奮闘中なのであります。ですがお妃様は、『もうなにも知らなかったあの頃には戻れない』と、お妃様の叔父上様であられるロイナー伯爵閣下のご説得にも応じず、王太子殿下の存在ごと、ご結婚の事実を忘却の彼方に葬り去るご決意を固めておいでである……という次第であります。

お妃様が感銘を受けた、お父様がお母様へ送った恋文って、どんなんよ……。

事態を打開するために、申込書を書いた王宮文書院の書簡士を探さないの？

という国中の乾いたその他諸々のごもつともな突っ込みは、作者の陰謀によって黙殺されます。

肝心の申込書は、誰が書いたのって???

ぼく？ ぼくではありませんよ。

なぜってぼくは、あくまでお妃様の周辺 ですから。

周辺その三（後書き）

とてもあほづな話ですみません。

目を通してくださいますと、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5358v/>

お妃様の周辺の物語

2011年8月16日17時09分発行